

島添 亮子さんに聞く

小林紀子バレエ・シアター プリンシパル

聞き手 川島 葵さん ●フリーアナウンサー



しまぞえ・あきこ
共立女子大学国際文化学部(現国際学部)卒業。小林紀子バレエ・シアターのプリンシパル・ダンサーとして古典から近代バレエまで幅広く主演するほか、新国立劇場バレエ公演(公社)日本バレエ協会公演「ジゼル」などで主演している。07東京新聞制定中川鋭之助賞、08橘秋子賞優秀賞、12服部智恵子賞などを受賞。

4歳の時に、体を強くするために始めたクラシックバレエ

川島 本日は、小林紀子バレエ・シアターのプリンシパルとしてご活躍なさっている島添亮子さんにお話を伺います。このバレエスタジオに島添さんが入っていらった瞬間に、全身から華やかなオーラが漂ってくるような感じを受けました。

最初に、島添さんがバレエをお始めになったきっかけを教えてくださいませんか。

島添 私が4歳の頃、かかりつけの小児科の先生が、「体を強くするために、バレエか水泳を習ってみたら？」と母に勧めてくださいました。そこで水泳教室へ見学に行ったのですが、たまたま厳しい練習をしているところで、水泳はやりませんでした。次に自宅のすぐ近くのバレエ教室を見て、「あのクラシックバレエの教室に通いたい」と私が言ったらいいのです。

川島 クラシックバレエというと、最初は

衣装が可愛いといった理由で始める方が多いのかなと思うのですが。

島添 私も母も、そういう衣装などを見たことは全くなくて、バレエの知識もありませんでした。たまたま、近所のお友達がそこで習おうかなと言っていたこともあって、私も通うようになったようなものです。

川島 週にどれくらいの頻度でしたか。

島添 金曜と日曜だったと思います。教室が本当に家からすぐでしたので、親も送り迎えの心配をせずに行けたのだと思います。先生がちょうどいらつしゃった頃に私が学校から帰ってきて、練習会場のセッティングをお手伝いして、「じゃあ、ちょっと家に帰って用意をして、後でまた来ます」といったような、ほんわかとした感じでした。

小学生の頃から

「将来は公務員になりなさい」

川島 ご両親もバレエは好きだったたので

すか。

島添 母は学芸会などは好きだったようです。最初はバレエのレッスンが週に2回でしたが、それが3回になり、小学校の先生から私立中学の受験を勧められたため、3年生の後半からは塾にも通うようになりました。母は書道を教えていたので、私もお習字を習って、さらにピアノも習うようになりました。

川島 それは、小学生にとって大変な忙しさだったでしょう。

島添 さすがにピアノは5年生の時にやめました。バレエは休むのがいやで、ずっと続けました。中学受験のためにバレエの練習を3カ月ほど休んだのですが、戻ってみたら、友達全員がピルエットという回転ができるようになっていたのです。その時はとても焦って、「これは大変だ」と思いました。だからといって、将来はバレエの道へ、などと考えていたわけでもなく、本当に楽しく続けていました。



川島 小さい頃からプロを目指していたわけではなかったですね。バレエをやめたいとか練習を休みたいと思ったことはありませんでしたか。

島添 なかったですね。両親からは、私が小学生の頃から、「将来は公務員になりなさい」とよく言われていました。父は九州男児で、厳しかったので、子どもながらに、

島添 亮子さん



将来はバレエのほうに進むということは絶対に無理だと感じていました。

川島 中学に入っても、バレエは続けていらっしやったそうですが、部活などはなかったのですか。

島添 中高一貫校に入学しましたが、バレエのほうは、同じ年齢の仲のいい友達がい人もいたので楽しく続けられました。部活もダンス部に入って、バレエの練習がある時は先に帰らせていただいたりと、両立させることができました。

中学から高校へと上がるに連れてバレエの練習も増えましたが、バレエのスタジオ

に行くとき日常のいやなことも全て忘れることができる、とても自由になれると感じていました。きっと、バレエで発散していたのでしょうね。

川島 このスタジオという空間は、島添さんにとって特別な場所なのでしょうね。

島添 当時、教えていただいていた先生は、とにかくスタジオに入ったら生徒をバレエに集中させてくれる方でした。愛情を持って真剣に怒っていただけ先生で、リハールは絶対に休んではいけないとか、音楽が流れている間は静かにするといったマナーにも厳しかったです。その頃から、スタジオで何かあってもそれを外に持ち越さない、スタジオは日常とは違う特別な空間だと感じていました。

川島 スタジオでは、どんなふうにレッスンが始まるのでしょうか。

島添 教室によっていろいろだと思いますが、私の場合は自宅のすぐ前が教室でしたので、家でストレッチをしてから行きまし

た。スタジオでは、生徒はレオタードにピンクのタイツにバレエシューズ姿で待っていて、バーレックスから始まります。

小学生くらいになると、自分でやりたいことがあれこれ出てくるので、普段から家で練習をしていました。

川島 日々の積み重ねなのです。中学や高校で勉強に集中しなくてはいけないときも、バレエのことが頭にあつたりするようなことはございましたか。

島添 バレエと勉強は分けて考えていましたが、試験期間中にバレエの発表会前のリハールがあつた時は、大変でした。そんな時はどうしていたのか、学校の後輩から聞かれたことがあります。とにかく、両方頑張るしかない」と話しました。

川島 バレエがあつたからこそ、勉強も頑張れたのではないのでしょうか。

島添 そうだと思います。

川島 高校生くらいになると、そろそろ自己主張といいますが、将来はこんなことを

やりたいといったことが出てきたのではないでしようか。

島添 バレエについて、自分の中では頑張っているけれど、上には上があつて、コンクールに挑戦する人もいたので、バレエの道に進むのは無理だろうと思っていました。しかし、先生が非常に熱心に教えてくださるので、とにかくそれに食らいについて練習をしていました。

先生からは、高校を卒業したらバレエの道に進むよう助言されていましたが、私は自信がなくて不安だったので、大学に進学することにしました。共立女子大学の国際文化学部には推薦で合格が決まり、高校の卒業式まで比較的フリーな時間ができたところ、バレエの先生から「コンクールに挑戦してみよう」と言われました。先生は、私が慎重なタイプであることを分かっていたらつしやったので、緊張しないように「賞を取るために出場するのではなく、発表会で踊る演目の練習のために出なさい」と言っ

てくださいました。

川島 結果は、いかがでしたか。

島添 ほかの人の踊りを見て、きれいだなすごいなと感激しながら、でも自分は発表会の踊りのためにここに来ていいるのだから、あまり緊張せずに踊った結果、入賞するという経験ができました。

「あなたはバレエをやめることができるのですか」

川島 不安があつたので大学に進んだというお話でしたが、その時点では、もつと自分の世界を広げたいとか可能性を追究したいという思いがあつたからでしょうか。

島添 そうですね。大学に通いながらバレエを続けることに対して、自分がどう感じるか見てみたいという思いもありました。

中学3年の春休みに、英国のケンブリッジで2週間、ホームステイをしたことから英国が大好きになり、またクラシックバレエの発祥は欧州なので、大学ではそれに関

連していることを学びたいと思いました。

3年次には英国に詳しい先生のゼミ、4年次では、学校案内の冊子でバレエについて書いていらつしやった中村喜和先生のゼミに入りました。私にとって、大学4年間で一番大きい出会いが中村先生でした。先生はロシア文学がご専門で、1998年にはロシア科学アカデミーのロモノソフ金メダルを受章なさったほどです。

その頃、私の周囲にはバレエに詳しい人がおらず、大学卒業後はバレエの道に進みたいと言つたら、バレエ関係者以外はみんなに反対されました。父からも、「実社会を



川島 葵さん

知っておいたほうがいい」と言われ、就職活動をしたのです。

川島 黒いスーツを着て、面接を受けたりなさいましたか。

島添 はい。ある銀行の三次面接で、面接官から不意に「あなたはバレエの話をたくさんしてくれましたが、バレエをやめることができるのですか」と、ごく普通の口調で言われました。予想もしていなかった質問にうろたえましたが、その時に「バレエをやめることはできない」と強く思い、自分の本心によりやく気付きました。

そこで、中村先生に相談しました。

川島 先生は、何とおっしゃいましたか。

島添 「バレエダンサーの世界に入ることです。ことは、芸術家を目指すということ。そんな素晴らしい人がこのゼミから出るなんて、すごいじゃないか」と喜んで、大賛成してくださいました。

先生は、ロシアへお出かけになった際にポリシヨイ劇場でバレエをご覧になったそ

うです。私は、バレエ関係者以外で「本物のバレエ、本物の芸術家」をご存じの方に会ったのは初めてでした。そんな先生が賛成してくださったので、一言一言がうれしくて、バレエに魅せられていた自分は間違いはなかったと確信しました。先生には、バレエに関連する本を貸していただいたり、大学時代にはバレエ教室の発表会に来ていただいたりと、たくさん応援していただきました。

大学で学んだおかげで、 作品の理解が深まった

川島 島添さんは、大学をご卒業なさって小林紀子バレエ・シアターに正団員として入団し、2000年に「くるみ割り人形」で主役デビューとなりました。

島添 大学を卒業するときに、「卒業したら2年間、バレエをやらせてほしい」と両親に話しました。

小林紀子バレエ・シアターで踊るように



なって、先生からは「あなたは大学の4年ぶん、遅いスタートよ」と言われました。

川島 それは、とても厳しい言葉に聞こえますが。

島添 「だから、とにかく頑張りなさい」と、常に応援していただきました。バレエダンサーを目指す若い人は、大学進学よりもバレエスクールなどを選ぶほうが多いでしょう。プロのバレエダンサーになるには、それだけ時間がかかるんですね。始めるのも、早ければ早いほどいい。

多分、自分はほかの仲間たちとはちょっと違う思いでここに来ていると感じていま

した。本当にバレエがうまくなりましたかったし、興味の対象が同世代の人とは異なっていたのかもしれない。練習がつらくても、「私は大学に行ったぶん、遅れているのだから」と自分に言い聞かせ、納得させることができました。

川島 いい意味で、あまり気にしなくなっただ、焦らなくなったということですか。

島添 そうですね。4年間、バレエのみに集中したわけではなかったために、いまバレエがやれるだけで幸せだと思いました。

また、大学の授業で英国について学んだり、美しい庭園やテールウェアの写真を見たり、社交界について知ったりしたことが、気が付かないうちに自分の中に蓄積されていたようです。上演する作品の時代背景や文化的なことにも注目することで、作品の素晴らしさに感動して、自分がそれに関われるだけで幸せで、細かいことは気にしなくなりました。

川島 大学を卒業してバレエに打ち込んだ

2年間は、どんな時間でしたか。

島添 ひたすらバレエに集中した2年間でした。2年たった時点で、よく「やめろ」と言われなかったと思います。私が疲れて帰っても、両親は文句を言わなかったし、リハーサルで自分に要求されているものが分からず、家に帰ってから悩んでいても、真剣にやっていることを理解してくれました。両親には、本当に感謝しています。

また、私がいまあるのは、2001年に、英国のロイヤル・バレエ団の振付家として活躍し、人間模様を描く作品で世界で最も有名なケネス・マクミランさん振り付けの「ソリテイル」の主役の少女役に抜擢していただいたおかげだと思います。自分の力だけではどうにもならない、素晴らしい振付家の作品との出会いに恵まれて、運がよかったのかもしれない。この作品の演技で、舞台批評家協会新人賞をいただくことができました。この「ソリテイル」があったからこそ、マクミランさんの「マノン」や、「眠

れる森の美女」「インヴィテーション」「グロリア」など数々の名作に主演するという幸運に恵まれることができたと思います。

私は、「アナスタシア」という作品に、2012年に主演しました。これは最後のロシア皇帝・ニコライ2世の一家、そして皇女アナスタシアの人生を描いたもので、一家に関わる人物として、怪僧・ラスプーチンも登場します。第1幕は家族の幸せな風景、第2幕ではロシア革命が勃発して貴族社会が崩壊し、一家全員が殺害されます。そして第3幕は、自分は殺害を免れた末娘・アナスタシアだと主張した、アンナ・アンダーソンのお話になります。

この作品の準備をしていたときに、かつてのロシアの様子などを中村先生にお伺いいただいたことがあります。そうしたら、いろいろなお話を聞かせていただいた上に、ロシアに行かないと手に入らないようなニコライ一家のとても厚い写真集を貸してくださいました。とても貴重な資料なので、

バレエ団の先生にもお見せしたほどです。もちろん、上演の際には先生をご招待して、見ていただきました。

さらに、本をお返しにあげたところ、こんどはボリショイ劇場をテーマにしたロシアの写真集を持ってこられて、「これをあげよう。文章は全部ロシア語だから、目次を英語に翻訳しておいたよ」と。本当に感激しました。

その後、2014年にチェーホフの「三人姉妹」をマクミランがバレエ化した作品に出演する際に、「またロシアの作品に出会うことができました」と先生にお伝えしたところ、「チェーホフは、好きな作家の一人です」というご返事をいただきました。先生は、チェーホフの小説をいくつも翻訳して出版なさっていましたので。

人から聞いたことは すぐに忘れて身に付かない

川島 プロのバレエダンサーは、振付家や

ほかの出演者など、いろいろな方とコミュニケーションを取りながら作品を作り上げていくそうですが、私たちも毎日の生活の中で、ほかの人とコミュニケーションを取りながら目標に向かって力を合わせる必要があります。コミュニケーションということで、普段から何か気を付けていらつしやることはありますか。

島添 言葉もちろん大切ですが、それ以上に作品に取り組む姿勢が大切だと感じます。作品の振付指導のために来日なされた海外の先生とのリハーサルでは、英国の作品をこの日本人、つまり私にやらせて大丈夫かという、いわば最初から最後までこちらが試されているようなものです。

クラシックバレエの大きな魅力の一つに、セリフや歌詞を使わずに身体を使って表現するということがあると思います。セリフがないおかげで外国の方と共演することもできます。私は、フランス、英国、イタリア、スペイン、デンマーク、ロシアの国際

的に活躍されているダンサーの方たちと共演しました。そうした方たちを相手役として演じるときには、話すよりもまず全力でぶつかっていくこと。自分の役柄はもちろん、相手役のダンサーの気持ちを考え、呼吸や感情を読み、よく見て、学び、自分で考えてやっていると、助けてもらえるようになりました。

川島 その真つすぐな姿勢が周りの方に伝わって、アドバイスをしていただいたりといったことがあったのでしょうか。

島添 ダンサーが自分から「この役をやりたい」と言うことはなく、キャスティングされてはじめてその役に向き合うことになります。そして、リハーサルで、要求されたレベルまで持っていないと上演できません。私のせいで日本人のダンサーが低く見られたらいいやだという思いで、ぶつかっていききました。

そうした毎日のリハーサルで、自分に対して、また自分と相手役のあり方について、

指導者がさらにもっと深い指導をしてくださる。作品や役柄の演じ方は、本に書いてあることって一つもないのです。

川島 教科書に書いてあるとか、お手本があるというものではないということですね。

島添 公演のビデオを見ても、人によって見方が違うことに気が付いたのは、入団してから何年も後でした。

川島 後輩から相談された場合は、何とお答えになりますか。

島添 人によって違うので、あまり軽々しく答えないようにしたいと思っています。そんなに簡単なものではないし、人から聞いたことはすぐ忘れて身に付きませんから。

川島 楽して学んでもだめだということですね。

島添 これは何だろう、どうしたらいいだろうと、自分が本当に苦労したことほど身に付きますよね。私も、お世話になった先輩がいるので、後輩に教えてあげたいの

ですが、「難しいね、一緒に頑張ろうね」と話すようにしています。

節目節目に難解な作品に出会い その内容や演技に没頭してきた

川島 お休みの日は、どのようにお過ごしになっていらっしゃいますか。

島添 リラックスすると同時に、身体も動かすようにしています。次の舞台のことを考えたりすることもあります。

川島 また新たな喜びや楽しみがあるわけですね。

島添 大学時代に学んだことやいろいろな悩み、葛藤が、現実に向き合ってリアルな人間の表現を求めるケネス・マクミランという振付家の作品に出会って生かされました。そのおかげで、いまの私があると思います。

彼の作品は、戦争や小説や歴史的な人物の人生をテーマにして、人間に焦点を合わせたものが多くあります。私は節目節目に



島添亮子さん（右）と川島葵さん
（2018年1月25日 小林紀子バレエ・シアターにて）

彼の素晴らしい作品に出会うことができ、振付家が求める役柄の解釈や演技に没頭してきました。また、ダンサーに高いレベルを求める指導者の方々に出会って自分自身が強くなれたし、繊細な気持ちは繊細なまま大事に持っていていいといったことを学べたように思います。

川島 本日は、貴重なお話をありがとうございました。